

集落の構成と生産活動

集落の規模は、各遺跡により異っている。住居跡が多数検出される遺跡から、数軒の住居跡しか検出できない場合もある。これらの遺跡における住居跡の多少は、単に数量的な事では無く、集落を構成する集団の多少として理解できる。集落は、血縁による単位集団によって構成されている。

中期に見られる、典型的な環状集落を整理すると、船橋市高根木戸貝塚に見られるような1集団による集落と、松戸市子和清水貝塚、市原市草刈貝塚のように複数の集団により成立している集落の存在が伺える。先にも触れたとおり、集落の生産活動は単に一集落に帰結するのではなく、地域性を持ったものである。この事から、生産活動を軸に、集団の結合、集団の共同作業が行われ、これが大集落集落群として表われているのである。

おわりに

これまで述べて来たように、縄文時代人の生産活動は、きわめて充実した集落を基盤として、合理的に行われようとしていたと考えられる。特に、環状貝塚に見られるような特定の生産活動を行っ

ていた集団が存在しており、それは、地域的な「分業」の中で行われていたと考えられる。環状貝塚以外にも大規模な集落、小さな集落が数多く存在する。それらの集落も、それぞれの役割を担っていたはずである。これらを一つ一つ明らかにし、諸関係を整理する事から、縄文時代の姿の一部が映し出されて来るだろう。

註1 西本豊弘「狩猟、漁撈の場と遺跡」

季刊考古学 7号 1984

主要参考文献

堀越正行 「縄文時代の集落と共同組織」

駿台史学31号 1972

清藤一順 「縄文時代集落の成立と展開」

研究紀要2(財)千葉県文化財センター 1977

後藤和民 「縄文集落の概念」縄文文化の研究8、社会・文化 1982

この他にも、多くの文献を使用した。紙面の都合上、掲載できなかった事をお詫び致します。

(1班・班長)

No.6 遺跡(新東京国際空港内)の撚糸文期の資料

宮 重 行

1. はじめに

本遺跡は成田市新東京国際空港用地内に所在し、栗山川の支流高谷川により解析された支谷の最奥部に位置する。昭和52年に調査が行われた結果、先土器時代ユニット1、縄文時代の住居跡9軒、土壇13基、焼土遺構及び炉穴15基、陥穴状遺構31基等が検出された。出土の遺物は縄文時代早期の撚糸文系土器文化のものが主であり、なかでも稲荷台式(第Ⅳ様式)末期の沈線文を主文様とする土器が初めて確認されたこと、日本最古の土偶が出土したことで知られている。

この遺跡は既に昭和56年に報告されている(註1)が、事実記載中心の上、何分にも限られた部数しか発行できなかったため、その内容が今一つ正確に知られていないきらいがあった。そこで、今回幸いに文を書く機会に恵まれたので、関係者

の責務としてその概要(特に撚糸文期について)を改めて紹介し、私の見解を明らかにしておきたい。

2. 周辺の縄文早期遺跡

遺跡の周辺は太平洋に注ぐ栗山川と利根川に注ぐ根木名川の分水地点になっており、広く平坦な台地が多く、その縁辺には当遺跡対岸に夏島期のNo.7遺跡(註2)、北には鶴ヶ島台期の大遺跡であるNo.14遺跡(註3)、井草期のNo.60遺跡(註4)、三戸期のNo.67遺跡(註5)など、多くの縄文時代早期の遺跡が立地している。また少し南へ離れるが、同様の地理的環境の富里村には撚糸文期の金堀遺跡(註6)、両国沖Ⅲ遺跡(註7)等もあり、この地域はまさに縄文時代初頭の遺跡の宝庫といつてよい。



第1図 周辺の縄文早期の遺跡
(国土地理院5万分1 成田を縮尺) 1 : 100,000

遺跡No.	出土土器	遺構
2	燃糸文	
3	井II, 夏, 稲	竪8, 炉穴1
5	井I	
6	井I II, 夏, 稲, 花 田上・下, 子, 野, 茅	住3(燃3, 条1) 竪1(燃), 炉穴
7	井, 夏, 稲, 田上, 鶺	住2
10	燃糸文, 条痕文	
13	井I, 稲, 鶺	
14	田上, 鶺	住3, 炉穴4, 竪2
18	井I, 田上, 子, 茅	住1(田上), 炉穴1
19	井II, 田上, 子	竪3(井I, 田上2), 炉穴1
51	井II, 夏	竪3, 炉穴1, 土1
52	条痕文	
55	井, 三, 田上・下, 茅上	炉穴2
56	井草I II, 田下, 茅上	住1(田下), 炉2(田下1)
60	井, 早期	住6(井), 炉穴
61	井, 田下, 茅	竪2, 炉穴・焼土10
62	押型文, 田上, 鶺	焼土
65	早期	
66	早期	
67	三, 田下, 茅	住12(三11), 炉穴
68	茅	炉穴10

井=井草式 夏=夏島式 稲=稲荷台式
 花=花輪台式 三=三戸式 田下=田戸下層式
 田上=田戸上層式 子=子母口式 野=野島式
 茅=茅山式 燃=燃糸文 条=条痕文
 住=住居跡 竪=竪穴状遺構 土=土壇

3. 遺構

検出された遺構のうち、燃糸文期として確実なのは5号と6号竪穴の2軒の住居跡と6号跡の炉穴であり、可能性の高いものとして4号竪穴があげられる。また2号竪穴も浅く不確実ではあるが他遺跡の例からみて燃糸文期の性格を持つものであろう。6号竪穴は焼けており、炭化したクルミの種子等が出土したが、採集した炭化材を炭素14年代測定した結果、9,050+230B.P (Gak-7954) という値が得られた。

他の時期の遺構では、3号竪穴と大半の炉穴は条痕文期に(註8)、1号竪穴は関山(二ツ木)期に、7, 8, 9号住居跡は縄文前期頃に(註9)属するものであろう。また陥穴状遺構31基が検出されているが、そのうち溝状のものは縄文中・後期の所産と考えられる(註10)。

4. 燃糸文系土器の出土状況 (A地点)

第I群土器としたもので、約24,400点を出土し、遺跡全体の出土点数の約9割を占めている。これをさらに次のように諸要素により6類に分類した。

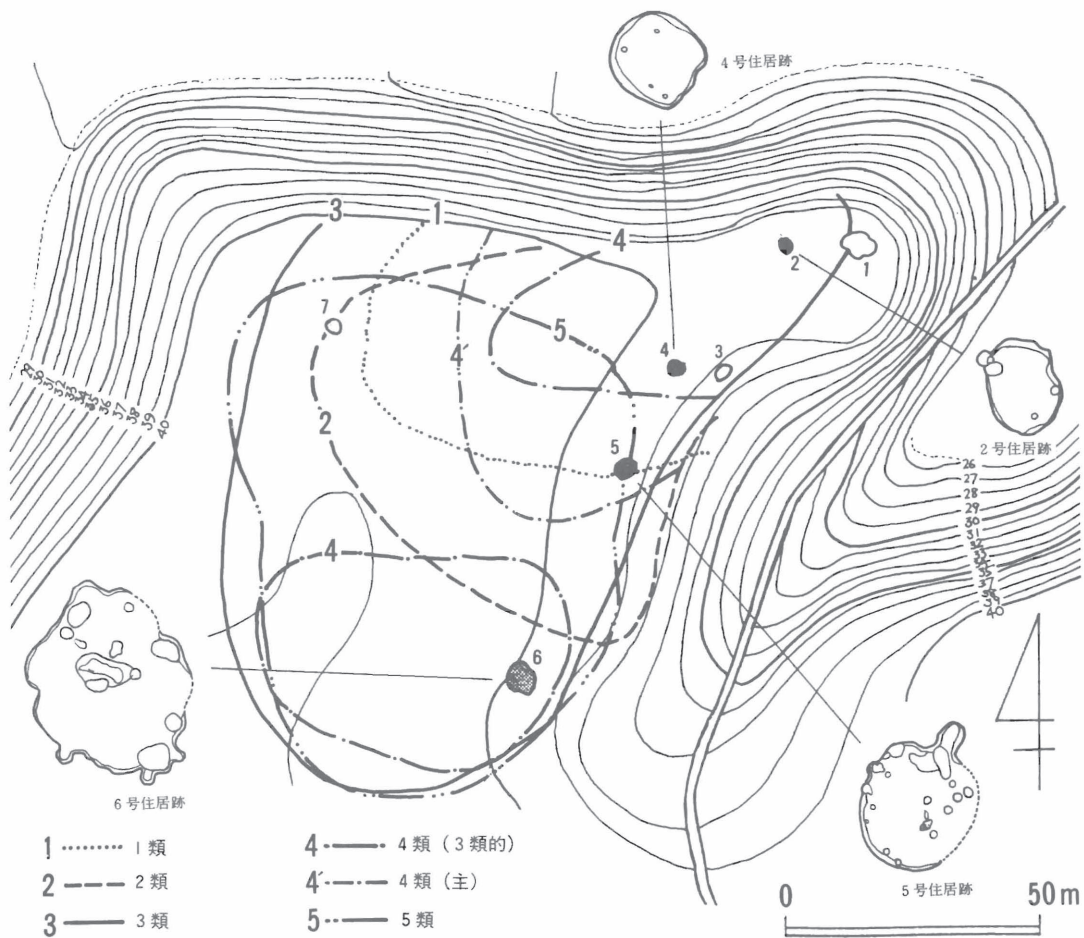
1類土器 井草(大丸)式, 第I・II様式とされているもので、口唇部施文のものである。A地点

の先端部付近を中心に160点の口縁部が出土し、個体数では50個体以上になる。縄文と燃糸文との比率は9 : 1である。

2類土器 夏島式, 第III様式とされているもので、1類土器と同様の地点から222点の口縁部が出土した。その個体数は90個を超えよう。縄文と燃糸文は1 : 2の割合である。

3類土器 大きくは稲荷台式, 第IV様式に含められる。広範囲に分布し、この遺跡での主体を占める。これを口縁直下から施文が始まるものを3a類, 口縁部に無文帯が形成されるものを3b類とした。3a類が1,904点, 3b類725点の口縁部片があった。縄文と燃糸文の比率は3a類では17 : 3で縄文が, 3b類では3 : 7で燃糸文が多くなっているが, 3類全体では7 : 3で縄文のほうが優勢である。

4類土器 口縁部と胴部を文様を廻らせて区切るという点で第V様式に共通するものである。口縁無文帯下部に刺突文を持ち石神式(註11)とよばれるものと、燃紐圧痕・絡条体圧痕を持つ花輪台(I)式・金堀式(註12)等を含む。口縁部は169点(60個体以上)出土し、大きくみて2箇所に分布のまとまりがある。本類では燃糸文のほうが縄



第2図 住居跡と撚糸文系土器の分布（住居跡は●）

文よりやや多くなっている（註13）。

5類土器 撚糸文系土器では、これまで例のなかった沈線文のグループである。143点の口縁部片があり、個体数は40個以上にのぼるものと思われるが、出土総点数からみると約4%とわずかである。分布の仕方は3類土器と似ている。

6類土器 無文のものである。出土総点数の約2割を占めており、そのうち口縁部は578点出土している。分布範囲は他類土器と重複している。

5. 石器

出土した石器のほとんどは撚糸文期の所産としてよい。最も点数の多いものは、石鏃で、細長い二等辺三角形で基部に浅い抉りを持つものが多い。また、磨製石斧が数多く出土している。全面を研

磨したものから、整形の際の粗割りの面を一部に残すもの、局部磨製のもの等がある。これらの石斧は夏島貝塚出土のものに比して成形が入念な上、研磨も広い面に行われており、より発展した様相がうかがわれる。一方、武蔵野台地での撚糸文期の典型石器とされるスタンプ状石器はここでは明らかなものはなかった。対岸のNo.7遺跡でも1点しか出土しておらず、房総半島の石材の乏しさからくる地域性を反映しているものだろうか。

6. 土偶・土製品

7点の(逆)三角板状の土偶、4点の土製品がある。この他にも土器片を利用した円板がある。土偶は3・5類土器（第Ⅳ様式）に伴うもので、当時としては日本最古であった。また、なかには乳房状の表

現があるものや、三角板の頂部や底辺の midpoint に刺突を伴うもの(註14)があった。

報告当時、上下を確定できなかったため、三角形の底辺を下として図示した。当センターの池田氏や近年発生期の土偶について論考を書いた原田氏は逆三角形が正式な置きかたであろうとしている(註15)が、単純に置きかたを限定することによりや抵抗がある。

当遺跡例に後続する花輪台式(第Ⅴ様式)土偶は、分銅形で中央がくびれ上半部には頭や肩、乳房が、下半部にはでん部が表現され、人形として

の特徴が備えられ、かなり発達した様相を示している。これほどに整った土偶にはより祖形たるものがあるべきだが、それが逆三角板状土偶ではあまりにも両者の間に隔たりがあるのでないか。

この時期の三角板土偶には刺突を伴うものが多く、この意味をライフライン・内臓の表現とする考えかたもある。



第3図 土偶

。だが少し発想を変えて、上部に逆三角形、下部に三角形を配置し、細い棒を刺して互いに結合した痕跡だとすれば、その形は分銅形となり、それはそのまま花輪台期の土偶の祖形たりうる。また下半部については通常の三角形としての置き方でもよくなるのである。

7. 本遺跡出土の撚糸文系土器について

○1・2類土器

1類土器は、量的には少なかったものの、様々な種類のものが見つけられた。B地点では完形に近いものが出土しており、道路で削られた部分にこの時期の住居があった可能性が大である。

2類土器には、(1)口縁部が外反し口唇部に施文されないことを除けば1類(井草Ⅱ式)と殆ど変わらないもの、(2)断面が角頭気味なもの、(3)円頭状で口唇に磨きが入り3類的なものの三者が認められる。報文では(1)と(2)は一括して2a類に、(3)は2b類とした。1類土器にも口唇部の施文を除

けば(1)と近似するものがあり、これらの近似しているグループは同時存在で、井草Ⅱ式(第Ⅰ様式)と夏島式(第Ⅱ様式)との過渡期的なものではないかと思う(註16)。

また、3類と類似する一群(2b類)が2類土器中にある。夏島貝塚で出土した夏島式(註17)とは実際はこれに含まれるものである。報文に述べたように、撚糸文土器の変遷は口唇部文様帯の消失と口唇研磨の口縁部への拡大と縄文原体がRLからLRへというながれでとらえることができた。この2b類はRLの縄文を持ちながら口唇が磨かれ円頭状をなすもので、稲荷台式(第Ⅳ様式)に直接続くものとしてよからう。

○3・4・5類土器

3類土器は3a類と3b類にわけた。3a類は今までの稲荷台式土器(第Ⅳ様式)としてよいが、3b類は3a類の要素を強く残しながら、口縁部に無文帯が形成されるもの(註18)で、当遺跡で初めて注目されたものである。強いて類例をあげるとすれば稲荷原式であるが、口縁下に沈線や凹帯を設け文様帯の区画化が進む稲荷原式とは明らかに異なっている。また3類土器では文様が多様化しており、3a類では横位のもの程度だったものが、3b類では斜状、格子目や羽状のもの、また押型文土器のように帯状施文されるもの等がある。

稲荷台式(第Ⅳ様式)と花輪台式(第Ⅴ様式)との差異は、前者では直口する口縁だったものが、後者では口縁部無文帯を持ち、羽状の文様も加わり、あるいは口縁下に段がつき外反するものが多くなる等、大きなものがあった。しかし、これに3b類の存在を中間に入れて考えると、2類から始まる口唇部の無文化が3b類になって口縁部にも拡がり、文様も多様化した口縁部の外面肥厚が、花輪台式(第Ⅴ様式)での外反する器形に連続すると理解できる。

4類土器は、(1)3類的な特徴を持つもの、(2)いわゆる花輪台Ⅰ式を含む。(1)は3類土器の器形をもち、口縁部無文帯の区画に半載竹管の刺突、細かい絡条体圧痕や浅い沈線が施され、胴部は細い撚糸文ないしは縄文(1例のみ)になるもので、刺突文のものは石神式(註19)として注目された。(2)は4類土器の主体となるもので、原体の条が粗く、全体に黒みをおびている。胴部が厚手で口縁部が薄くなるもの、口縁と胴部の境でくびれて肩をな



第4図 No.6遺跡の撚糸文系土器

3 a類 1, 2 3 b類 3, 4 4類 (3類的) 8, 9 4類 (主) 10~12
 5 a類 5 5 b類 6 5 c類 7

し、口縁が外反するものがめだつ。

なお第Ⅴ様式の花輪台（金堀）式では口縁部の無文帯を区画するために横位の沈線や原体押圧を用いているが、これは3b類にはない手法である。4類中には刺突文や絡条体圧痕文・沈線を廻らして区画する(1)のグループがあり、これらは既存の分類では第Ⅴ様式、なかでも石神式であるが、3類的な特徴からみて(2)の典型的第Ⅴ様式からは分離したほうがよかろう。

5類土器は3a・3b類の分類に準じ、口唇下から施文されるものを5a類、口縁部無文帯を持つものを5b類、また4類の原体押圧のように横位の沈線で口縁部を区切るものを5c類とした。沈線文は原体が細く先の丸いもので、浅く施文したものが主であり、また、ほとんどは器面を十分調整した後、1本ずつ単独で施文されている。文様のパターンは縦位を基調とするが、他に横位、斜格子、矢羽状、羽状、鋸歯状等がある（註17）。

沈線文をもつ5類土器の位置をどこに求めるか、議論の多いところであろう。古くは夏島式に絡条体を引きずってつけた条痕が、新しいところでは沈線文系土器があるが、後者では、5類土器との間に隔たりがありすぎる。撚糸文は拓本では沈線に見まちがうほどで、第Ⅲ様式後半（夏島期）に生まれた絡条体条痕に始まり、縦位施文の伝統の崩れる3類・第Ⅵ様式の段階に撚糸文が沈線に転化され、撚糸文系土器の文様のひとつとして用いられたとするのが妥当なところだろう。

5類土器の文様パターンも、3類（それも3b類のものに）と共通するところが多く、5a類は3a類に、5b類は3b類に対比できよう。一方、5c類の口縁下の横位沈線文、胴部の羽状沈線文は4類土器（花輪台式）の羽状繩文とのつながりを強く感じさせる。だが、口縁下に沈線の廻らされる5c類も、口縁部が無文化されている点では3b類との差異はなく、沈線文は文様区画の手段として用いられる性格があるので、口縁部無文化を意図したとすれば、自由に施文できる沈線を使って口縁下に廻らせ無文帯を表現することは自然であり、5c類の横位沈線は、従来の文様パターンの分類基準からいけば、次の段階とされているが、3b・5b類とほぼ同時期に生まれてもおかしくはないだろう。

また4類土器の中にも3類の器形をもち、口縁

部無文帯の区画に刺突文や絡条体圧痕文等各種の文様が施される3類的なグループがあった。私はこれらも口縁部無文帯区画の開始という面で、5b・c類と同意匠になるもので、同様に3b類に併行し、第Ⅳ様式の末期、即ち稻荷台式と花輪台式との過渡期に位置づけたいと思う。4類土器の主グループ（第Ⅴ様式）はこれら3b類グループの影響を受け誕生したものであろう。口縁部無文帯は強く意識され、その区画は各種の施文具でなされるようになる。原体は太くなり、文様は羽状や縦と斜行の組合わさったものが隆盛となるが、5類土器の沈線文の伝統も、稻荷原式のように凹帯を廻らせるものや、花輪台式のⅡ式とよばれた中にある口唇直下に一条の沈線が廻るもの等、5類土器から引き継がれるのである。

○6類土器

無文のものであるが、これはどの時期に含めるか決め手がない。無文土器は夏島式には既に現れており、序々にその比率は増して花輪台式に至っては、かなりの量が無文である。本遺跡では3類的なものが主であるが、撚糸文期の終末頃とされているケズリをもつものや、厚手で4類的なものもあり、総じて新しい時期のものが多いと思われる。

8. おわりに

今まで述べてきたように5類土器はそれ単独で存在するものではなく、沈線文自体は撚糸文系土器における文様要素の一つにしかすぎない。第Ⅳ様式（稻荷台式）前半（木の根3a期）は施文の多様化のめばえの時期であり、後半（木の根3b期）では、それが様々の形で具体化している。そして、その文様要素中に沈線文や刺突文、原体の圧痕文が採用され、5類のような土器がうまれる素地ができたものだろう。

3b類、5b・c類、4類の一部は第Ⅳ様式と第Ⅴ様式の過渡期として一時期をなすものであり『木の根3b期』とし、前半にあたるいままでの第Ⅳ様式・稻荷台式の時期を『木の根3a期』とし、第Ⅳ様式を細分する考えをここに示しておく（註20）。

また土偶についてもふれたが、その誕生についてはまだまだ問題点が多く、固定概念を持つことは避けるべきでないだろうか。土器作りが始まれば土偶の製作は可能である。また、土器を持たな

撚糸文系土器の編年私案

小林分類	型 式	No.6 遺跡分類 (宮私案)
第Ⅰ様式	井 草 Ⅰ 式	Ⅰ (a・b・c類)
第Ⅱ様式	井 草 Ⅱ 式	Ⅰ (d・e)類
第Ⅲ様式	(井草Ⅲ式)	2 a類 (Ⅰ類的)
	夏 島 式	2 a類 2 b類
第Ⅳ様式	稲荷台式 木の根 3 a期	3 a, 5 a類
	(石神式) 木の根 3 b期	3 b類, 4 (3類的)類 5 b・c類
第Ⅴ様式	花 輪 台 式	4 (主)類

※ Ⅰ類細分は報文参照のこと。

くとも粘土を知っていればその可能性は否定できない。今後そのような、より古い時期のものが発見されることを期待したい。

以上、思うままに述べてきたが、紙面の制約等で意を十分尽くせなかった面がある。また、これから更に実証しなければならぬことが多い。幸いこの地域は早期の遺跡に恵まれており調査された資料も数多いので、今後、機会を設けじっくりと取りくんでいこうと思っている。

註

- 1) 宮重行 池田大助 野口行雄「木の根」1981
- 2) 西川博孝「No.7 遺跡」新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ 1984
- 3) 野口行雄「No.14遺跡」新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 1983
- 4) 「No.60遺跡」千葉県文化財センター年報 5 1979
- 5) 「No.67遺跡」千葉県文化財センター年報 7 1981
- 6) 篠原正「北総台地における縄文時代草創期後半について」千葉県の歴史17号 1978
- 7) 篠原正「両国沖Ⅲ遺跡発掘報告」1982
- 8) 炉穴・炉跡は伴出遺物が少なく時期決定が難しいが、炉穴は少なくとも縄文早期に属することは確実である。6号跡は6号堅穴とほぼ似た炭素14年代測定の結果が出されている。
- 9) 9・8号堅穴では茅山式、花積下層式、黒浜式の土器が、9号堅穴では8号出土のものと同接する花積下層式が出土した。いずれも覆土中

であるが、付近は茅山式から黒浜式にかけての遺物が集中しているので、8・9号の時期もそのいずれかに設定できよう。報文では早期末から前期前葉として広い時期の中においており、断定はしてはいない。

- 10) 岩手県都南村湯沢遺跡では縄文後期初頭の遺構と相互に重複関係にある。
高橋信雄他「都南村湯沢遺跡 (昭和52年度)」岩手県埋文センター文化財調査報告書第2集 1978
- 11) 鈴木道之助「東寺山石神遺跡の撚糸文土器について」東寺山石神遺跡 1977
- 12) 註6文献 4類土器の撚糸文のものを指すと思われる。
- 13) 3類的なグループは1例以外は撚糸文なのでそれらを除けば比率は逆転して縄文がやや優勢になる。
- 14) No.6 遺跡の出土土器の3類グループ (第Ⅳ様式) に所属させるのが順当なところか。報告後、富里村両国沖Ⅲ遺跡でも1例出土した (註7文献)。この遺跡は夏島式を主体とみられ、当遺跡例よりも若干古い可能性がある。
- 15) 原田昌幸「発生期の土偶について」奈和第21号 1983
- 16) 註6文献。篠原氏はこれらのうち縄文を持つものを井草Ⅲ式とすることを提唱されている。各遺跡での例からみると、縄文と撚糸文は常に共存しており、一方の文様要素のみをとって形式を設定するのは納得できないが、意図するところは私と同様である。
- 17) 杉原荘介 芹沢長介「神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚」明治大学文学部 1957
- 18) 縄文や撚糸文を施文後、内面から口縁にかけて研磨し、口縁部を無文にするものが多い。
- 19) 註11文献。
- 20) 最近、共同執筆者の一人である池田氏はセンター紀要8のなかで「木の根式」を設定した。彼は5類土器のみを抽出してひとつの型式名を与えており、私の考えとはかなり異っている。これについては後日検討したい。

池田大助「北総台地における沈線文土器群の出現」千葉県文化財センター研究紀要 8 1984

(第5班 大堀川河川事務所)